
疑う五題

かわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疑う五題

【Nコード】

N4269Z

【作者名】

かわ

【あらすじ】

この作品は「r e w r i t e (<http://loneflylion.nobody.jp/>) の「疑う五題」をお借りして作成しております。連作のため短編集から独立させました

-それは誰に触れた唇ですか-

「だからさ、何でそんなことですかねられなきゃいけないのか手聞してるんだよ」

背後で聞えよがしな溜息とともに、心底うんざりした声が聞こえる。

けれどそれに言葉を返すことも、態度で何かを示すこともせずにいると、うんざりした様子にさらにイライラとした様子が混ざる。それでも、俺は何の反応も返さない。

「じゃあ、お前は何か。俺にケイと遊ぶなっての？視線も合わないで、手も触れないで、二度と会うなっての？」

ふざけんな、と吐き捨てられた声音に、俺は初めて肩を震わせた。そんなことを言いたいんじゃない。会うな、なんて、触るな、なんて同じ家に住んでいるのだから無理だってことは分かっている。

俺が今抱いている気持ちも、どれほど馬鹿らしいか知っている。でも…

でも、不安で仕方がないんだ。たったそれだけの理由で、俺は、こんなにもお前を怒らせてしまっている。

肩の震えを抑え込むように、小さく抱いた膝を、さらに強く抱きしめると、うつむいた視界に見慣れた手が映り込んで、俺の握りこんだそれに重なった。

何を思う間もなく、顎を強くつかまれ、グツと後ろへ向けようとされる。咄嗟に抵抗したのは奇跡に近かった。今、俺の顔なんてあ

いつに見られたくなんてなかった。だから精いっぱい抵抗し、頬に食い込む指をのけようとしたが、それはいつの間にか両手まとめて戒められた俺には不可能だった。

努力の甲斐なく、奴の思うままにされても、せめてあいつの顔だけは見るまいと視界を閉ざす。

うんざりしているだろうあいつの顔に、さらにわずらわしさが混ざるのをみたくなかった。あいつに軽蔑されるのが怖かった。そして、嫌われて、興味の一片すら向けられなくなる瞬間が、何より恐ろしかった。

「…ひでえ顔。そんなに厭なのかよ、ケイのこと」

分かってているんだ。この不安の正体なんて。

「何か言えよ」

これは嫉妬。自分に自信のない俺が、俺以外のすべてに向ける、醜い劣等感だ。

「算……………」

ふと訪れた長いような短いような沈黙の後、促されてあいつ…芳井の顔を見る。

その端正な顔に浮かぶのは、困ったような、怒ったようななんとも形容しがたい表情だった。

「俺がお前以外受け付けないって知ってるだろ。それでも駄目なのか」

優しく、少し情けなくも聞こえる声。

わかってる。わかってるんだ。

芳井が俺を嫌う事なんてないこと。たとえそうなくても、率直なこいつが鬱憤をため込んでまで俺といることはないってこと。

こいつの行動すべてが、答えだったこと。

卑屈に過ぎる俺を芳井が嫌わないのは、恋愛感情よりむしろ親の愛情に近い。それだけの歴史を、俺たちは刻んできた。

それでも…

「いいよ。お前が望むなら、他のものなんていくらでも捨ててやる」

他を魅了してやまないその光が、少しでもこの手からこぼれてしまうのが、俺は何より恐ろしい。

こんな関係は間違っているのかもしれない。

けれどこの関係を否定する権利は、俺たち以外、誰も持ちえないのだ。

01(後書き)

2009/03/16

- 三十分間のタイムラグ -

日付が変わる数分前、いや、もしかしたら今日に日付が変わったときから、明日が待ち遠しく感じていたかもしれない。

そんなさまを算に悟らせる気はなかった。別に、格好付けていたわけではないが、こんなことで落ち着きをなくすのはあいつだけで十分だ。

秒針が進む音が自棄に耳につく夜の静寂の中、算はどうしているかと想像する。

算が日中からそわそわしていた様子には敢えて触れずにいた。日が暮れ、揃って夕食をとったときも、ちらちらと俺を窺う様子を知らぬふりで通した。

あいつは今泣いているだろうか。それとも、すねて、疲れて眠ってしまったのだろうか。

無意味に流れる機械を通した声も、ニュース番組内のそれに変わったところには耐え切れずに電源を落とした。それから働き続けた規則音は、その瞬間に近いことを俺に伝える。

俺はゆっくり自室を出て、はやる足を鎮めながら隣室へ向かった。電気の類は照明を含めすべて落とした。あとは扉を開く音さえ気を遣えば、あいつに気づかれることなく目的を達せられるだろう。

視界に入りこんだ布の山は静かな寝息を漏らしていた。その様を見て、俺はふと、こぼれる笑いを止められなかった。

「なんだかんだ言っつて、お前も気に入ってるんじゃないか」

俺に気付いたもう一人の同居人を追い出し、俺と箕との、完全な二人きりの空間を作ると、それまでであったぬくもりを取り戻すように箕は己の傍らを手繰った。

その手を抑え込み、ついで肩に手を添え箕が起きた時の準備を整える。そして…

日付が変わった瞬間に、俺は待ち焦がれた言葉を箕の耳に吹き込んだ。

02(後書き)

2009/03/17

- あなたが見えない -

目が覚めるとまだ空は明けてもおらず、見上げた天井は黒に覆われていた。

何故こんな時間に目が覚めてしまったのだろう。その答えは、壁のすぐ向こうからかすかに聞こえた。隣は芳井の居室だ。布団をはねのけた俺は、下階の住人の迷惑も顧みない足音を立てて芳井のもとへ走った。

わざと騒音をたてて扉を開いたのは、あわよくば芳井がこれで目覚めてくれないかという思いと、早く芳井の顔を見たいという思いの両方からだ。けれど願いは半分しか叶わず、もう片方も、想像した通りではあるがこんな苦しそうな様子が望みではなかった。

枕元に灯りを点し、人工の光のもとで見た芳井の額には脂汗がにじんでいる。それを見て、芳井がうなされ始めてどれほどの時間が経っていたのかを臍氣に知る。

きつと、芳井はあの夢を見ているのだろう。夢であって、夢ではない。しかし現実でもない、残酷な記憶。どれだけ時間が経っても、こうして芳井を苦しめる記憶に太刀打ちするすべを持たない自分が、いつもどれほど口惜しいことか。そんな俺と、芳井を苦しめ続ける記憶を心底憎く感じる。

けれど今優先すべきは、なによりも芳井をそこから救いあげることだ。

呼びかけ、頬を張って、肩をゆすってようやく開かせた芳井は、

しかし俺の元には戻ってこなかった。

意味のない言葉をなおも吐き続け、開いた虚ろを映す瞳から絶え間なく涙を流して痛々しく震える。

涙は時に血から精製されるといふが、芳井のはまさにそれだ。比喩ではなく、幼い芳井が流したそれが流れているのだ。

泣き暴れる芳井を、あの時できなかった代わりにしっかりと抱きしめて背を諭す。

ゆっくりゆっくり、帰って来いと願いを込めてさす。そして早く過去から戻って来いと…俺の所へ戻ってきてほしいと絶る。

駆け付けた時、人形のようになってしまうていた芳井がいた所は、現実ではありえなかった。夢なんて、生易しい言葉で終わらせてしまうにも、あれはあまりに強烈だった。

それから失ってしまった、以前の芳井はもうどこにも存在しないが、俺が求めているのは、今、この瞬間をイキル芳井だよ。

だから早く戻って来い芳井。

お前が視線を向けていいのは、過去ではなく、この俺なんだ。

03(後書)

2009/03/18

- 濁った硝子の向こう -

俺を取り巻くすべてはまるで霧に包まれたかのようにぼやけてい
る。

いつからとかどうじて、何てことは気にならない。気づいたらそ
うだったのだから、もしかして生まれた時からそうなのかもしれない。
い。

けれどそれは俺が周囲を見渡した時の情景ではなく、周囲が俺を
見た時にそう感じるよう、作られた壁だ。袖振りあつただけの見知
らぬ他人に俺という本質を見せることに対する嫌悪感を、俺は霧と
同じころから感じていた。

煩わしい他。あいつを排斥しようとする、その他大勢。

何も知らないヒトガタたちに、俺は俺の真実を一片たりとも触れ
させはしない。

今日もまた、蠅のようにたかってくるそれらをいなして、俺は俺
の本質の待つ家路をたどる。

04(後書き)

2009/03/19

- 足元は泥濘に消えゆく -

そして、俺と芳井の日常は穏やかに過ぎてゆく。

ふと目が覚めると、辺りは既に薄暗くなっていた。

今日は珍しく早くに帰宅できたので、久しぶりに芳井の好物を大量の食材を買い込み、下ごしらえまでを済ませて休んだソファで、本当に眠ってしまったようだ。

今が何時か、と思いい体を起こすと、足元に固いような柔らかいようなものが当たる。そして、

「…いてえ」

不機嫌ここに極まると言わんばかりの形相の、芳井が身を起こした。

「お、おかえり」

どうやら寝ている間に言いそびれてしまった挨拶を口にする、彼は聞きとりづらい低い声ながらも返答をくれた。そのことにほっとする間もなく、俺は芳井にソファから蹴落とされた。…さすが芳井、1回は1回、だった。

「つか、こんなところで何寝てたんだよ」

その、声音と表情のアンバランスさに思わず頬が緩む。

目ざとくそれを見とった芳井の眼光を受け、俺は慌てて理由を話したが、けれど全て言い終える前に俺は腕をつかまれて自室へと連行された。

「芳井：？」

「いいから寝ろ。とろいお前のことだから気づいてないだろうが、ひでえ顔色してるぞ」

そう言っつて隣へもぐりこんできた芳井に慌てるも、再度腕をつかめれ、強制的におとなしくさせられた状態ではそれも長くは続かなかつた。けれどもし抑え込まれなくても、俺はきつと慌てていたと思う。

滅多にはつきりとしたことを口にしない芳井が、俺のことを気遣つてくれたのだから、そうでなければここにいるのは俺じゃない誰かだとすら言える。

嬉しさと、多少の気恥かしさに焼かれた頬を枕で隠し、添い寝する芳井の体温がさそう心地よい眠りへと舞い戻っていった。

時々、思う事がある。

この関係は正しくはない。傷の舐めあいにすぎないのだと。

しかし俺たちの関係は、正しいことの方が間違いなのだ、そう感じる。

誰かにとって正しいことが俺達を切り刻んだように、誰かを不快にさせることが俺たちには無二の道なのだ。

柔らかく芳しい香りに誘われてベッドを後にする。リビングから続くキッチンには、見慣れた後姿があった。

その背におはよう、と、何をしているのか、と尋ねると、芳井は人の悪い顔を俺へ向けた。

「ちようどいい所に起きてきたな」

そして何を思う間もなく、俺は昨日のように、しかし昨日とは明らかに違う理由と目的で腕をひかれた。

「1回は1回、だろ？」

上機嫌の芳井。本来なら喜ばしいそれが俺にはどうしても憎く見

えてしまうのは、今の俺にはしようのないことだと思う。

さんざん引つ張られ、振り回された末に告げられたのは、不可抗力とは言え、芳井から与えられた俺への理不尽な罰だった。いわく、「期待させた責任はとれ」

…と。

つまりは昨日の夕食の支度だけして寝てしまったことへの腹いせだろう。目覚めを促してきた、今朝の芳香の正体は芳井がしたくした、俺の好物のそれだった。

さんざんな目に遭い、半ば筋肉痛になりかけの体を酷使して俺は作業台の前に立っている。

それに文句だけはこぼさないでいられるのは、隣に芳井がいて、共に仕上げ作業にいそしんでいるからだ。

捻くれ者で、けれどとても素直な。そんな芳井と歩むのは、針の隠れた帳よりも光さず朝がいい。

そんな穏やかな日常を、俺と芳井は噛みしめている。

05(後書)

2009/03/20

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4269z/>

疑う五題

2011年12月20日00時54分発行